☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第30号　2002年11月5日（火）
発行　歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
TEL/FAX 078-803-5565

▲兵庫津遺跡出土物の展示コーナーにて解説を行う岡田章一氏（2002年10月6日撮影、能福寺講堂にて）

■□■目次■□■

被災地八年目の歴史文化の状況　奥村　弘…2

◆◇特集◇◆　第二回震災復興市民歴史講座
よみがえれ、兵庫の中世～兵庫区能福寺で、第二回震災復興市民歴史講座、開催　藤田明良…3
第二回　震災復興市民歴史講座参加記　内海寧子…4
第二回　震災復興　市民歴史講座「よみがえれ、兵庫の中世」に参加して　川端康世…4

震災復興　市民歴史講座プレ企画「現代都市社会の歴史と課題～阪神・淡路大震災の経験から～」　島田克彦…5
震災史料整理について　河野未央…6

『歴史資料ネットワーク活動報告書』完成　松下正和…7
「シンポジウム　公害・環境問題資料の保存・活用ネットワークをめざして」　橋本唯子…8

■関連団体・会員からの情報
神戸史学会、直木孝次郎さん招き創立40周年記念講演会　大国正美…10
（仮称）見直そう尼崎の宝・中世の富松城展…　11
現地見学会「八上城縦走」のご案内……　11
■書評欄
神戸新聞文化生活部編『ひと萌ゆる　知られざる近代兵庫の先覚者たち』　奥村　弘…12
■文献情報……　12

被災地八年目の歴史文化の状況

歴史資料ネットワーク代表委員　奥村　弘

阪神・淡路大震災から八年が経とうとしています。来年の1月17日に向けてのマスコミの取材がはじまり、私のところにも新聞記者が訪れています。最近の地元の新聞論調やマスコミの取材のあり方は、風化しつつある震災の記憶や教訓をどう伝えていくのか、という形のものが増えてきました。

しかし被災地の現実からみると、震災はかならずしも過去のものになったわけではありません。震災後の区画整理事業はなお継続中ですし、町の中にぽっかりと空いた土地や不自然な場所にある駐車場など、町の中に入れば、なお震災後の状況が継続しているところが少なくありません。

また被災地の各都市の財政状況は、不況の中で震災後、その是非は別として様々な事業を行ってきたこともあり、現在極めて大変になってきています。歴史文化に関係する諸機関でも予算の削減が続いており、被災した歴史資料が古書店に出ても、博物館や史料館で購入することも出来なくなっています。それだけでなく、人員削減により、機関そのものの存在が危うくなるところも出てきました。

歴史文化の領域では、八年目を迎えようとするこの時期、実に様々な形で、震災の問題が現実の課題として大きな意味を持ち続けています。5月の改組で新たなスタートを切った史料ネットはこのような事態の中で活動を進めています。

新しい市民講座は、6月に第一回「震災後の発掘で変わる古代史像」、10月に第二回「よみがえれ、兵庫の中世」を開催しました。久しぶりに行ったこともあり、多少の混乱はありましたが、多くの市民や研究者の参加のもと活発な議論をすすめることができました。講座後、ゆっくりと地元の方やボランティアスタッフで語り合う新企画のワインパーティーも、第二回目にはかなり盛り上がっていました。

11月10日の第三回「市民と深める阪神間の江戸時代史」は、震災後の地元で史料保存や研究に携わってきた方々にも企画への参加をお願いし、新たな市民講座のあり方を作りだそうと考えております。是非ご参加のほどお願いいたします。

神戸大学に残された保全史料の大学院生を中心としたボランティアによる整理、兵庫津研究会・西摂研究会・神戸都市史研究会など、被災地の歴史研究会も継続してすすめられており、その成果を様々な形で生かしていきたいと考えております。

一方震災資料の保存・活用については、様々な現代史資料の保存・活用、現代史アーカイブのあり方と関連させながら、継続的に議論を展開しています。阪神淡路大震災記念人と防災未来センターの震災資料の公開も一部はじまっており、この課題への対応も進めていきたいと考えております。本号にも、これと関係して公害資料保存活用の論考を掲載しております。ぜひ御味読ください。また来年二月ごろ開催予定の第四回の近代史の市民講座は、これと関連して、神戸大空襲について考えるものを準備中です。次号で詳細はお伝えできると考えいます。

一方、史料ネットが改組の時掲げた、400名の個人会員・サポーターでネットを物的にも人的にも支えていくという目標は、なお道半ばにも達しておりません。皆様のお近くの方にぜひ会員やサポーターになっていただけるよう、呼びかけて頂ければありがたく存じます。

（おくむら・ひろし／神戸大学助教授）

◆◇特　集◇◆　第二回震災復興市民歴史講座

よみがえれ、兵庫の中世
兵庫区能福寺で、第二回震災復興市民歴史講座、開催

藤田　明良

今年度から始まった震災復興市民歴史講座の第2弾「よみがえれ、中世の兵庫」が、去る10月6日（日）に開催された。今回は史料ネットと地元の兵庫津の文化を育てる会の共催で、会場は「兵庫大仏」で有名な天台宗の能福寺講堂である。冒頭で育てる会の井上慶一会長が、地元では平清盛や楠木正成が良く知られているが、それとは異なる中世の歴史を今日の講座で勉強したいと挨拶し、続いて藤田が「新史料に見る兵庫津の興亡」と題した講演をおこなった。

講演ではまず、今回存在が確認された能福寺の古記録は、接点が少なかった地元の歴史伝承と専門家の研究の橋渡しとなる内容であることが紹介された。さらに具体例として、これまで兵庫津との関係が、西大寺側の史料でしか確認できなかった叡尊が登場すること、彼が兵庫で供養した石塔が清盛塚である可能性が強いこと、上皇から遊女にいたる幅広い階層が結縁し様々な思いが込められていたであろうこと、その後、新関設置をめぐって朝廷・幕府と住人・業者が対立するが、後者の中核となった山僧たちと能福寺関係を検証する必要があることなどを述べた。

続いて岡田章一氏（兵庫県埋蔵文化財事務所）が中世の兵庫津遺跡について、阿部功氏（神戸市教育委員会）が真光寺付近で検出された近世の堀跡について、それぞれ報告し、休憩時間には展示されていた中世の遺物の解説もおこなわれた。市沢哲氏（神戸大学助教授）を司会におこなわれたディスカッションは、会場から寄せられた質問への回答があった後、兵庫津の歴史について、文献史と考古学のそれぞれのイメージのすり合わせや、歴史遺産の活用をめぐって議論がおこなわれ、能福寺住職の発言で締めくくられた。最後に史料ネット代表の奥村弘氏が、本日の講座を機に地元の要望に応じた企画を、今後とも続けていきたいと挨拶し、閉会となった。その後、同じ会場で懇親会（会費1000円）が開かれ、参加者とスタッフ30人ほど出席、全員が自己紹介と今日の感想を述べた後、なごやかな雰囲気のなか、1時間ほど懇談した。

当日の参加者は112名（スタッフ含む）。地元を含め兵庫区や長田区・須磨区などからの参加者が多かった。回収したアンケートによれば、講演や報告はおおむね好評であり、特にビデオプロジェクターやスライドを使って視覚にも訴えたことが評価されたが、その一方で内容をもっと平易にという声もあった。また、今後も講演や見学などの企画を続けて欲しいという要望もあり、応えていきたいと考えている。また、史料ネット編『歴史のなかの神戸と平家』19冊など書籍の売上げも多かった。

今回、能福寺は、会場と器材などを無償で提供していただき、また参加希望者からの問い合わせについても対応していただくなど、多大な協力をいただいた。また後援をいただいた兵庫区役所も、広報誌での告知をはじめ宣伝に協力いただき、また事前の打合せでもアドバイスをいただいた。さらに会場設営や運営には、史料ネットのスタッフの他、神戸大学、神戸女子大学などの院生・学生がボランティアとして協力してくれた。このような各方面の協力によって、今回の講座は、成功裏に終了することができた。

（ふじた・あきよし
／天理大学助教授・史料ネット事務局長）

▼講演中の藤田明良氏

第二回　震災復興
市民歴史講座参加記

内海　寧子

10月6日、神戸市兵庫区の能福寺において第2回震災復興市民歴史講座「よみがえれ、兵庫の中世」が開催され、藤田明良氏の中世における兵庫津興亡についての講演、岡田章一氏、阿部功氏による兵庫津遺跡の発掘調査報告を聞く機会を得ました。まず、藤田氏の講演は兵庫区逆瀬川町に現存する清盛塚建立をめぐる伝承や、今回発見された、西大寺中興の祖である叡尊と能福寺との結びつきを著す史料などから中世の兵庫津像を紹介された興味深いものでした。また、藤田氏の講演と合わせて、岡田氏の考古学からみた中世の兵庫津、さらに阿部氏の真光寺を中心とした発掘調査報告により中世から近世にかけての兵庫津の地域的変遷が概観できました。藤田氏の文献史料をもとにした講演と、発掘調査の報告、特に実際に出土した備前焼の壷や陶磁器などが展示され、中世の貿易港としての兵庫津像や寺院が点在する様子をイメージすることができ、神戸という街をいつもと違った視点から眺めるよい機会にもなりました。

また、当日は参加者が多く、地元の方々の地域意識の高さにも驚きました。ディスカッションでは兵庫津の港湾機能など文献や発掘調査だけではまだ不明な点が多く、地元の方々の情報も大切であるというお話がありました。私自身大学で研究をしていますが、地域史像を明らかにするにあたって文献史料だけでなく、地域との対話の重要性、また地域伝承の背景についても考えさせられました。

（うつみ・やすこ／
関西大学大学院・史料ネット運営委員）

◀講演中の阿部功氏

第二回　震災復興　市民歴史講座
「よみがえれ、兵庫の中世」
に参加して

川端　康世

１０月６日の日曜日、場所は能福寺で上記の市民講座は開催された。参加された年齢層は、中世の兵庫に興味がある市民の方２０代以上？の老若男女、兵庫津の関心のある、また現時点で兵庫津を研究している研究者等、正確な数字が分からないが、１００名以上が集っていたように思えた。市民講座の内容は、大まかに２種類の視点から分けられる。１点目は藤田明良氏によって、明らかにされた新史料からによる史料からの視点、２点目は岡田章一氏・阿部功氏の両氏による発掘調査の成果である。岡田氏は中世の兵庫津の街並みの変遷を、阿部氏は真光寺の境内の領域を共に明らかにされたという成果である。三氏の報告後、その成果を共有する為に報告者と参加者のディスカッションがあった。ディスカッションでは、その成果に対する質問の他に、「兵庫」に対する地名のこと、旧湊川の河川についてなどの質問が時間ぎりぎりまで参加者から出され、兵庫津だけでなく地元の歴史に対する関心の高さが表れていたように見受けられた。

私自身、兵庫津の事に関心を持ち、今回の市民講座に参加した訳だが、新資料と発掘の成果を聞いた時には、兵庫津の成果が目覚ましく発展したことに対して素直に喜び、今後、新しい展開もあるのではないかと予測させられた。是非、次回も上記のような市民講座は開催して頂きたいし、今の時点で次回の市民講座の事を考えるとワクワク・ドキドキものであり、都合が付く限り参加したい。最後に、市民講座を開催して頂いた皆さま、そして報告者の皆様に良い機会を与えて頂いたことにお礼を申し上げる所存である。

（かわばた・やすよ／
大阪市立大学ＯＢ・（株）図書館流通センター勤務）

震災復興　市民歴史講座プレ企画

「現代都市社会の歴史と課題～阪神・淡路大震災の経験から～」

島田　克彦

3月24日、震災復興・市民歴史講座プレ企画「現代都市社会の歴史と課題～阪神・淡路大震災の経験から～」があすてっぷKOBE（男女共同参画センター、神戸市中央区）で開催された。史料ネットは震災後の活動実績を踏まえた改組を予定しており、改組後は市民を対象とした「震災復興　市民歴史講座」の連続的な実施が事業の中心に位置付く見通しである。今回の企画はこうした史料ネットの活動・組織再編を見据えたプレ企画である。

第１部は室崎益輝・内田俊秀両氏による講演であった。室崎講演「現代社会への警告としての阪神・淡路大震災」は、震災後の現状を歴史的に評価するための視点を示そうとする試みである。室崎氏によると、現在、阪神・淡路大震災の現代史としての評価は「残念な方向」へ定まりつつある。世界史的に見るとリスボン大震災（1775年）などの自然災害が社会変動を促した事例が少なくないが、日本の場合は災害や災害が社会にもたらした被害や影響に対する原因追及が非科学的である。災害からの立ち直りを次の時代の力に変えてゆくためにも、阪神・淡路大震災を歴史的・科学的にきちんと評価することが重要である。以上の問題提起に対する室崎氏自身の回答は多岐に渡るが、中でも科学の進歩を経済的発展に結びつける考え方を克服する「文明史論的視点」が筆者の印象に残った。その具体例が木造建築の評価であろう。震災における木造家屋の倒壊に関しては施工合理化、維持管理、行政によるチェックシステム、大学における建築学教育などの諸問題を多面的に考察する必要があり、木造家屋そのものが全否定されるべきではないのである。こうした視点は摩天楼主義―経済至上主義の相対化、近代の評価と克服へと結びついてゆくであろう。室崎氏は震災を歴史の変動として捉えたいと述べて講演を締めくくった。筆者は、震災の歴史的・科学的評価を通じた市民社会構築への提言であると受け止めた。内田講演「都市の歴史と文化財」は、都市の住み心地を決定する要因としての歴史と文化財の活用を考察した。具体例の一つは、内田氏が約20年居住してきた魚崎である。魚崎では震災後に元住吉神社とだんじり祭りが復興し、地区単位の人々のつながりや生活の規範がふたたび機能するようになったと言う。二つ目はサラエヴォ市で、当地では歴史遺産を戦争から守るための国際会議が開かれた（2001年4月）。内田氏は会議に出席した経験から、武力紛争下では敵対民族の文化遺産を破壊することが戦略として重要視されていた事実や、現在のサラエヴォ市民が民族の共存を目指して新しい文化を創造しようとしている動向についてスライドを用いて報告した。災害や武力紛争からの復興過程における文化の役割を考えるという点では企画の趣旨に相応しいものであったが、地域の文化と社会構造との歴史的関係に関しては、さらに突っ込んだ分析を示していただきたかった。

▼パネルディスカッションの様子

第２部は、先の両氏に古山桂子氏、奥村弘氏を加えたパネルディスカッションであった（司会藤田明良氏）。古山氏は、新聞記者として被災地の取材をする中で「おにぎりか文化か」、つまり衣食住が満たされない状況下で歴史や文化の重要性を強調することに意味があるのか、と自問自答を繰り返した経験を語った。氏自身が指摘されたように、両者を二項対立的に捉える視点の克服が重要であろう。奥村氏は史料ネットの活動を通じて、いかにして歴史像が構築されるのか、その過程を社会に示すことの重要

性を認識したと述べた。

例えば日記などの個人的な記録は、社会的に共有されることによって初めて「史料」として活用できるようになるのである。しかし近代・現代の日本では、社会科学における「資料」の意義付けの弱さ、戦前の地域認識が戦後に解体されてしまったこと、地方自治がコミュニティーを公的に位置づけてこなかったことを要因として社会的共有の論理が確立されてこなかった。今後はこの克服が我々の課題となる。以上の指摘は、史料ネット活動の理論的到達点を示すと言えよう。この後、パネラー同士、あるいはフロアーとの若干の意見交換を行い、全プログラムを終了した。

当日の参加者は約30名と、これまでの関連企画と比較して少なかったのは筆者にとって意外であった。筆者自身は歴史学を学ぶ者として、標題に関心を持って企画に出席した。

震災の実相をいかにして残してゆくか、歴史と現代社会の緊張関係をどうやって保つか、といった問題関心を持つ者は分野や立場の違いを越えて広く存在している筈である。改組後の史料ネットが、こうした人々にとって意義ある意見交換の場となることを期待したい。

（しまだ・かつひこ／大阪市立大学大学院）

震災史料整理について

河野　未央

歴史資料ネットワークでは、震災直後から被災史料のレスキュー活動を行ってきました。現在も巡回調査を行うなど、地域から史料の散逸を防ぐための活動を継続しています。こうしてレスキューされた史料の多くは自治体などへ移管されましたが、そのうちの一部は未整理の状態で、史料ネットの事務局に残されたままになっていました。これは、阪神大震災後も各地で地震が相次ぎ、それへの対応に追われていたこと、また震災記録をめぐる新たな問題への対処をせまられたことなど、緊急度の高い課題に次々に取り組まなければならなかったという史料ネット側の状況もありましたが、その一方で震災後、自治体の財政状況とも関わって、恒久的な保存機関への移管が見込めない、という問題が浮上してきたからでもありました。

こうした史料の処置については、史料ネットでも様々に議論してきましたが、改組後、懸案であった未整理史料の仮整理を行うことが運営委員会で決定しました。それは、整理されることで、まずは一般公開が可能になっていくと同時に社会的に利用しやすくなるということ、次に一般公開や研究等に社会的に利用され、認知されることで所蔵者が返還を特に希望しない史料を恒久保存してくれる機関が見つかりやすくなることが期待されるからです（所蔵者が希望する場合は返還することになります）。そこで、さしあたっては仮目録の作成によって史料の利用度の向上をはかろう、ということになりました。

史料整理は、一部は神戸女子大学文学部史学科今井修平研究室において整理していただくことになりましたが、残りについては、神戸大学大学院生の添田仁氏・三村昌司氏が中心となって、ほぼ月一回のペースで行うことになりました。この整理は、①史料の利用までを視野に入れた可能な限り統一的な目録作成を、②史料整理の未経験者も含めたボランティアによって行うということになり、したがって、どのような方針でもって進めていくのかという点が大きな課題となっていましたが、①史料整理についてのマニュアルを作成することによってある程度の統一性をはかり、②作業効率そのものを求めるよりも、継続して整理に参加してもらうことに重点を置き、メールなどの事前連絡を徹底することなどをとりあえずの方針として、まずは試験的に神戸大学内部の学部生などを対象として作業を開始しました。

これまで行われた整理は計4回（6月12日、7月14日、9月7日、10月26日）ですが、作業自体は順調に進んでおり、すでに長浜家・森本家・増田家という3つの文書群の整理を終え、現在山本家文書の整理に取りかかっています。先にあげた3つの文書群の整理を終えた段階で、ひとつめ

の課題である、統一的な作業進行という面では、特に問題なく行えたため、以後は学内のみを対象とする試験期間を終え、より広くボランティアの参加を募ることにしました。というのも、ふたつめの課題である継続的な整理への参加は、学内のみを対象としていたのでは、人員確保という点では不十分であるためです。特に、前回の作業より整理を開始した山本家文書は、近代の酒樽問屋の経営関係史料（中田樽丸関係史料）・町会史料等を中心とした、ダンボールにして47箱分にもなる膨大な文書群であり、少人数での整理は限度があり、整理作業自体が停滞・長期化してしまう恐れもあります。したがって、今後の整理については、ぜひ皆さまの積極的な参加を期待し、ボランティアとして協力をお願いしたいと考えています。

なお、今後の日程等は以下のようになっております。詳細は史料ネットホームページにも掲載されていますので、そちらもご参照ください。

■日時：10月26日（土）、11月16日（土）、12月15日（日）の午前10時～午後5時
■場所：神戸大学文学部古文書室（文学部本館４階、ＪＲ六甲道駅・阪急六甲駅より神戸市バス３６系統「神大文理農学部前」にて下車）。

※参加にあたっては、事前に史料ネット（tel&fax:078-803-5565、e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp）まで連絡をお願いします。

（こうの・みお
／神戸大学大学院・史料ネット運営委員）

『歴史資料ネットワーク活動報告集』完成

松下　正和

馬場義弘氏が史料ネット活動報告書編集作業の途中経過についてお知らせしましたが（ニュースレター第22号を参照）、地域連携推進研究費に基づく共同研究（「阪神・淡路大震災の資料保存と都市社会解明のための総合研究」）の研究成果報告書の一部として、このたび『歴史資料ネットワーク活動報告書』が2002年3月に完成いたしました（以下『活動報告書』と略）。

のべ１１０人を越える方々が寄稿され、1995年2月の史料ネット開設以降の活動内容を現段階において集大成したものとなっています。編集は佐賀朝・馬場義弘両氏と松下が担当しました。以下では、編集人の立場からこの活動報告書の内容を簡単に紹介してみたいと思います。

300頁にもわたる『活動報告書』は、大きく三つの部分に分かれています。一つ目の論説編は史料ネット開設当初から運動に携わってきた九名により史料ネット活動を様々な角度から分析したものです。二つ目の活動記録編は、史料ネットの様々な活動について当時の状況をできるだけ網羅的にかつ正確に記録していただきました。その結果、この活動記録編自体が史料ネットの活動を評価・検討する際の貴重な史料となっています。以前、馬場氏はこの『活動報告書』を編集する際にできるだけ「役に立つ」という視点を活かしたいと提言されていました。そこで、レスキュー活動（第一章）・パトロール活動（第二章）・仮整理作業（第三章）の章末には、当時作成した報告書の実例を掲載しそれぞれにキャプションを付けたりするなどの工夫を凝らしました。その意味では、三つ目の資料編も各活動の参加者・参加人数の一覧や参考文献などを掲載することで、史料ネット活動の規模がどのようなものだったのか、また史料ネットの活動がどのように広報されてきたのかを少しでも明らかにできたのではないかと思います。さて、各編の章立てを紹介すると、

＜論説編＞
＜活動記録編＞
第一章　被災史料救出活動（レスキュー活動）
第二章　巡回調査（パトロール）
第三章　救出史料仮整理作業
第四章　埋蔵文化財保全活動
第五章　震災資料保存活動
第六章　市民の歴史意識へのはたらきかけ
　第一節　歴史と文化をいかす街づくりシンポ

ジウム
第二節　歴史と文化を考える市民講座
第三節　その他
第七章　地域サブプロジェクトの展開
第八章　被災各自治体と関係団体の取り組み
第一節　地方自治体
第二節　関係団体
第九章　活動関係者の感想・意見など
＜資料編＞
1　活動一覧
2　参加者一覧
3　活動日誌
4　関係論文一覧

となっています。また、今後ニュースレターでは、第七章で紹介された各地での古文書を読む会などの活動や、レスキュー・巡回活動等によって救出された史料の整理状況など、『活動報告書』で掲載しきれなかった現在の動向をリレー連載で紹介していく予定です。こちらのほうもご期待下さい。

現在のところ、この『活動報告書』は関係者のみの配布となっています。2002年度の史料ネット活動方針案（ニュースレター第29号参照）に「活動総括集の年度内出版をめざす」とありますように、いずれは出版の可能性も含めて運営委員会等で議論を深めていきたいと考えています。また、皆様のご意見をいただければ幸いです。最後になりましたが、執筆いただいた方々にお礼申し上げます（『活動報告書』ご希望の方は、事務局までご連絡下さい。有償）

（まつした・まさかず／神戸大学大学院・史料ネット運営委員）

「シンポジウム　公害・環境問題資料の保存・活用ネットワークをめざして」

橋本　唯子

このシンポジウムは、四日市公害訴訟の判決から三十年目の節目にあたる今年、改めて公害・環境問題に関わる資料のあり方をめぐる全国的なネットワークの確立を目指して、「四日市公害を記録する会」と「公害地域再生センター（あおぞら財団）」が中心となって呼びかけ、2002年7月21日、四日市市で開催されました。当日は、午前中に四日市市史資料庫と塩浜小学校の見学を行い、午後からはシンポジウムが開かれました。

午前中の見学では、まず四日市市史資料庫を訪ねました。『四日市市史』は、全20巻にも及ぶ編さん作業がなされ、既に発行されています。この資料庫には、明治期の地方新聞の製本や、それ以外の例えば村方の史料についても、膨大な量の製本が整然と納められていて、それらがかつてきちんと調査、写真撮影された上で残されたものだということを知ることができました。歴史資料は、調査がなされてからは、その家で、これまで残されてきたように、それからも残されていくというのが、最も自然で有効な形ではないかと私は思います。そういった意味で、このようにしっかりと製本されているのは素晴らしいことです。そして同時に、このような方法で心配なのは、史料が家々で保管され続けていくことができるかどうかという点です。この点を補うためにも、調査した側と各お宅とをつなぐ絆を作ることが大切だと感じました。

その後、公害が最も激しかった地域にある塩浜小学校を見学しました。この地には、現在も学校を取り囲むようにして工場群が立ち並んでいます。こちらでは主に「四日市公害を記録する会」代表の澤井余志郎氏から、熱のこもったご説明をお聞きすることができました。屋上の展望台からは、コンビナートが林立するさまを眺め、ほど近い海岸線から吹く浜風には磯の香りもなく、なんとももの悲しくなりました。また校舎内には今も、その当時使用されていた「うがい室」が残されていました。今では他地域から、小学生がこの「うがい室」を見学に来るのだそうです。こうやって、今も実際にこどもたちが通う校舎内に、この「うがい室」が残っているということが、とても大きなことだと思います。切り離された空間ではなく、このような形でこそ、まさにここで、こうやって自分たちと同じ年頃のこどもたちが苦しい思いをし

ていたのだということを、実感として受け止めることができるのではないでしょうか。

午前中のこの見学会には、大型バスに乗りきれないほどの参加者が集まり、大盛況でした。そして午後からのシンポジウムは、これをさらに上回る人数の熱気の中で始まりました。

まずはじめに、芝村篤樹氏からの基調報告がありました。芝村氏によると、公害・環境問題は20世紀最大の問題のひとつでありながら、住民団体や行政側に資料保存の意識が総じて弱く、企業の資料に至っては全く不明に近い状態で、これらを保存していかなければ、その経験を伝承していくことができない恐れがあるとのことです。また近現代史資料そのものの社会的な認知度の低さにも問題があります。けれども、それぞれの地域において、資料館の設置などを計ることによって公害・環境問題資料の保存・活用をめざすネットワークを作り上げること、そしてそのそれぞれの地域が全国的に連携をもつネットワーク、このふたつによって、さまざまな課題を克服していくことができるのではないかとの提起がありました。

その後、各地の公害資料や環境資料の保存の現状などについての、事例報告がありました。

まず環境省文書の保存の現状について、横矢重中氏より報告がありました。この中で、現在環境省では情報公開法に基づき資料を開示し、定期的に見直しをするとともにホームページからのアクセスも可能になっていることなどの指摘がありました。

次に小川千代子氏からは、各省庁から国立公文書館への文書の移管状況についての報告がありました。ここでは特に保存する資料の選別について、それぞれの立場によって資料の定義そのものが異なることがあり、困難な面もありますが、これからはデジタルアーカイブなどに注目して、そういったルールづくりを進めていくことが大切だとのことでした。

次に藤浪敏雄氏からは、四日市市史の編さん作業について、現代史編の編さんにあたって、前述の澤井氏の資料が大きな意義をもったこと、しかしこれらの資料を今後も保存・活用していくためには、市史編さんという体制だけではなく、より恒常的な形が望ましいという報告がありました。

次に高野秀男氏からは、新潟水俣病資料館の設立について、説明がありました。ここではやはり「負の遺産」を残すにあたっての課題（建設場所の難航や被害者自身の意識、展示に現場の声を反映させることの難しさなど）に直面した現状などが、明らかとなりました。

次に佐賀朝氏から、史料ネットの保存活動と、その活動のうち「尼崎公害患者・家族の会」事務所の資料救出活動に協力した事例についての報告がありました。ここでは特に、この活動が尼崎市立地域研究史料館と史料ネット、さらには史料ネットでの経験をふまえ地域住民らを加え結成された「尼崎戦後史聞き取り研究会」とが連動し、「新尼崎市史」編さん事業へと結びついていることを挙げ、こういった活動がこれからの資料保存・活用のあり方にひとつの示唆を与えるものになるのではないかとされました。

最後にあおぞら財団の達脇明子氏から、西淀川公害における資料館設立をめざす活動についての報告がありました。この中では、大阪人権博物館の企画展（「西淀川郊外と地域の再生」）で、展示とともに患者さんが語り部として参加、その意義や重要性の一端が患者会の方々自身に実感されたというケースの指摘がありました。

会場からも、倉敷のみずしま財団や、西淀川公害患者と家族の会の方などから、それぞれの立場からの発言がありました。その後研究者などからもさまざまな発言が相次ぎ、別子銅山では、公害という負の遺産とともに、銅山自体を文化遺産として観光に活かしていて、いわばマイナスをプラスに転化した例があることなどが指摘されました。

最後に、こういった形で全国的な連携をもち、ノウハウを共有していくことによって、公害・環境問題をめぐるさまざまな課題を克服していくことを確認し、盛会のもとにシンポジウムは終了しました。

このシンポジウムに参加して、私が感じたことを少し書かせていただくと、まずこれらの問題で、早急に考えなければならないのは世代交替の問題です。もちろんこれは公害・環境問題資料に限った話ではなく、すべての歴史資料の保存に関していえることですが、一部できちんと保管がなされていたとしても、それが周囲の人々にも正しく認識されていなければ、受け継がれることが難しいのです。特に公害問題の資

料については、患者さんたちや彼らを直に支えた家族・弁護士の方々も含め、高齢化が進んでいます。貴重な資料を次世代に引き継ぐためにはやはりきちんとした体制づくりが望まれます。私は今、伊丹市で主に近現代資料の整理にたずさわっていますが、たとえば、飛行場をめぐる騒音公害関係資料なども例外ではなく、早急に考えなければならない問題だと思います。そしてもうひとつは、今回史料ネットでは尼崎公害資料の救出をめぐった事例を報告しましたが、それだけでなく震災資料そのものも、同じように現代資料としての課題に直面しているということです。わたしたちにとって震災はまだまだ大きなものですが、時の経過とともに少しずつ風化し薄れてしまっているものがあります。それでも、残したい、伝えたい思いがあり、それを繋ぎ止めるものが資料なのだと、それは少し状況は違うけれども公害の被害者の方々も同じことなのではないかと、私は思います。まだまだこの取り組みは、始まったばかりですが、こうやって横のネットワークを作っていくことで、各地に埋もれたままになっている、そのまま消えていってしまうかもしれない人々の思いを、少しでも残していくことができれば、と思いました。

（はしもと・ゆいこ／伊丹市立博物館）

■関連団体・会員からの情報

神戸史学会、直木孝次郎さん招き 創立40周年記念講演会

大国　正美

史料ネットの学会会員の神戸史学会が、今年創立40周年を迎えた。記念行事として、9月1日に神戸市東灘区深江本町の深江会館で、神戸出身の大阪市立大学名誉教授・直木孝次郎氏を招いて講演（神戸市、市教委後援）、交流会などを開いた。

同会は、神戸市立図書館などに勤務した在野の歴史研究家の落合重信さん（1995年没）が1962年に設立。戦後間もなく誕生した神戸の市民クラブ「市民同友会」を土台に、研究誌『歴史と神戸』を隔月発行している。米騒動や兵庫開港などそれまであまり注目されていなかった近代史研究を手掛けた。県史編纂を陳情したり、農村歌舞伎の調査や保存にも取り組み、地名研究などにも成果を残している。

講演では直木孝次郎氏が「摂津国の成立」の題名で講演。直木氏は、摂津は「津国」から「摂津国」になったとして、6－7世紀のヤマト政権を支える豪族（大夫層）の出身地が大和・河内・紀伊に偏り、相嘗祭にかかわる神社も大和9社、河内2社、紀伊4社で、山背、津国には相嘗社がないこと、さらに屯倉についても、畿内では大和・河内が主になっていることから、もともとは王権の基盤に繰り入れられていなかったと説いた。

そして山背・津国が王権の基盤に組み込まれたのは、継体朝ではないかとして、北河内の樟葉で即位し、山背・弟国の筒城に遷都したこと、山陵が津国・三嶋藍野と推定されていることなどを挙げた。さらに「摂津国」の成立について、難波津・務古水門・大輪田船息・大和田浜などとその後背地と政権との関係が深まる推古－孝徳期ごろを挙げた。また、神戸市灘区に河内国魂神社があり、凡河内寺山が攝津国雄伴郡宇治郷にあったとする「法隆寺伽藍縁起流記資材帳」を根拠に、摂津がもとは河内の一部だったという説には、それまでの主張をベースに批判した。詳細な内容は、論文の形で、12月発行の「歴史と神戸」に掲載される。

続いて、総会が行われ、委員を随時受け付けしていること、毎月第4土曜の午前11時から神戸市灘区岩屋中町の事務所（田中印刷内）で行われていること、直近の編集計画などを報告して、交流会へ移行した。

（おおくに・まさみ／史料ネット運営委員）

（仮称）見直そう尼崎の宝・中世の富松城展

■ねらい

富松城跡は、西摂（摂津国西部）の中世史を語る上にも、また、現存する平野部の中世城館跡の特徴をよく残している点でも、貴重な文化遺産であることが、多くの専門家から指摘されている。

そこで、尼崎の宝・富松城跡の歴史や文化財価値をわかりやすく展示するとともに、富松城の全貌に迫り、富松城跡を次世代に残す必要性を広く市内外に情報発信し「地域の歴史遺産を活かした、誇りの持てるまちづくり」を考える一助とし、また、市民・関係者に理解と協力をお願いする。

■場所　富松神社参集殿（尼崎市富松町２丁目23-1）

■期間　平成14年11月28日（木）～12月１日（日）

午前10時～午後４時**（ただし最終日は午後１時30分まで）**

■主催　富松城跡を活かすまちづくり委員会**（問い合わせ　TEL06-6421-5830　善見壽男）**

尼崎市教委が富松城跡発掘の成果を展示するほか、まちづくり委員会の皆さんが富松城跡の歴史をテーマとした展示を行なう予定です。

現地見学会「八上城縦走」のご案内

兵庫県篠山市にある八上城と法光寺城は、同市への運動の成果もあって宅地開発による破壊をまぬがれ、現在、国史跡化に向けた作業が進められています。今回はこのうち、八上城とその城下町を中心に、最新の研究成果を学ぶ、現地見学会です。

■日　時　１２月１４日（土）　午前１１時～午後５時半

■講　師　村田修三氏・仁木宏氏・高橋成計氏

■参加費　１００円

■集　合　午前１１時　篠山城大手門前駐車場

■コース　篠山城出発→東仙寺跡→奥谷城跡→八上城跡→主膳屋敷跡→解散

■主　催　**八上城・法光寺城遺跡群保存対策会議（大阪歴史学会・日本史研究会・大阪歴史科学協議会・関西文化財保存協議会・神戸大学史学研究会・八上城研究会の６団体で構成）**

■連絡先　大阪樟蔭女子大学日本文化史学科佐久間貴士研究室

０６－６７２３－８１８１㈹　（携帯０９０－９０９８－９０４８）

※雨天の場合、山麓部中心のコースに変更する場合があります。

※集合時までに昼食を済ませておいて下さい。また、飲み物は各自ご用意下さい。

交通のご案内

JR大阪駅（９時２５分発、丹波路快速）→篠山口駅（１０時２７分着）→神姫バスJR篠山口駅西口バス停（１０時３４分発）→二階町バス停下車（１０時４８分着）右折すぐ篠山城

■書評欄

神戸新聞文化生活部編

『ひと萌ゆる　知らざれる近代兵庫の先覚者たち』

奥村　弘

歴史とは様々な人間の営みの集積だから、そこに生きるすべての人々によってつくられる。このことは誰もが異存のないところであろう。ところが最近、歴史書を手にしてみると、あたかも時の支配者や英雄の決断が歴史を動かしていたように書かれているものが多い。不透明な社会状況や、経済不況などにより閉塞感が強まる中で、そのようなものが求められているのかもしれない。

このような中で本書は、県内各地での近現代史研究や自治体史編纂の成果をふんだんに盛り込み、あえてほとんど知られていない人々を丹念に描き出した好著である。

明治憲法を民主的に改正しようとした島田邦二郎、百年前に国内第二番目の養老院を開設した寺島ノブヘ、原爆症を解明し治療法を開拓した都築正男、男女平等教育を主張した木村熊二、埋もれた在野博物学者大上宇市、洋画家で、初代尼崎市長の桜井忠剛、大蔵流狂言師で人間国宝の善竹弥五郎、宝塚の男役一号である高峰妙子ら日本人だけではなく、近代中国思想家の梁啓超、風見鶏の館を設計したラランデ、西洋医学の普及に貢献したベリーなどの外国人も取り上げられている。

政治・教育・医療福祉・実業・芸術などその分野は様々だが、激動する近代を自らの意志で開拓し、様々な人々を巻き込んで生きた点で共通する人々である。六頁ごとに区切られた五四人の生涯を一つ一つ読み進めていくことによって、彼らの背景に生きる近代兵庫の様々な人々の息づかいと、そこに展開する地域の近代をつかむことができよう。

兵庫県の近代史の探求は、歴史資料の空襲による喪失、自治体文書館の未確立など困難が多い。本書の刊行によって、身近な人物や歴史資料の重要性が見直され、市民レベルでの新たな人物発掘がいっそう進められていくことを期待している。

（二〇〇一年刊、神戸新聞文化生活部、四六上製、三四七頁、一八〇〇円）

■文献情報

論文等表題	筆者（著者）	誌名（書名）	巻号	発行年月日
透過する記憶	菅祥明	震災・まちのアーカイブ『瓦版なまず』	13	2002/07/27
もうひとつの展示-『1.17SHOP」にみるセンター問題-	森本米紀	震災・まちのアーカイブ『瓦版なまず』	13	2002/07/27
メモリアルと防災	季村範江	震災・まちのアーカイブ『瓦版なまず』	13	2002/07/27
痕跡論	笠原一人	震災・まちのアーカイブ『瓦版なまず』	13	2002/07/27
バーコードに閉じ込められた言葉	大門正克	震災・まちのアーカイブ『瓦版なまず』	13	2002/07/27
阪神・淡路大震災を未来につなぐ-震災資料収集事業の経験から-	佐々木和子	地方史研究協議会『地方史研究』	299（52-5）	2002/10/01

<<編集後記－事務局だより>>

○本号より、若干誌面をリニューアルしました！

「関連団体・会員からの情報」

史料ネットの学会会員からの情報や、関連団体からの行事案内の情報を掲載しています。読者の皆様からも情報提供をお待ちしていますので、よろしくお願いします。

「書評欄」

新刊図書に限らず、「文献情報」欄で紹介している図書・論文についても掲載予定です。今回は、奥村弘さんに寄稿していただきました。読者の皆様のご投稿お待ちしています。

○次号からも「リレー連載」として『活動総括集』の原稿を執筆して頂いた方に現在の活動状況を含めて、紹介していただく予定です。このように、本ニュースレターの内容をますます充実させていきますので、ご期待ください。

○会員の皆さまへの「史料ネットの行事案内」について

経費節減のため、従来の郵送（ハガキ・封書）によるご案内から、電子メールによるご案内へと変更させていただいております。電子メールのアドレスをお持ちの方は、是非とも事務局(s-net@lit.kobe-u.ac.jp）までお知らせ下さい。振込用紙に電子メールのアドレスを記載していただいた方を中心に現在では、３０名ほどの方々にご協力いただいております。また、2002年度活動方針案にもありますように、将来的にはメールニュースの配信も開始予定です。ご協力・ご理解頂きますようお願いいたします。

○第29号の表紙目次、「第一回震災復興市民講座参加記」を寄稿してくださった光井佳代子さんのお名前を誤って掲載していました。訂正してお詫び致します。

（ま）

個人会員への入会と“News Letter”購読のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。

歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News Letter”は年４回発行いたします（年間購読料：郵送費込み1000円）。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。

また、表題にもありますように、読者の皆さまには是非とも個人会員へのご入会（年会費：個人会員5000円、学生・院生会員は半額）ないしサポーター（1口3000円以上）としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申しあげます。

史料ネット郵便振替口座

名義　歴史資料ネットワーク　　口座番号　００９３０－１－５３９４５

第3回　震災復興市民歴史講座

～市民と深める阪神間の江戸時代史～

■日　時　２００２年１１月１０日（日）
　　午後１時～４時４０分（終了後ワインパーティー）
■場　所　園田学園女子大学（尼崎市南塚口町七丁目 29-1）
　　阪急神戸線塚口駅下車
　　徒歩 12 分　バス 5 分（尼崎市営バス阪神出屋敷行 14 系統）
　　JR 塚口駅下車　徒歩約 20 分
　　JR 立花駅下車　バス 10 分（阪急塚口行 14 系統）
■内　容
　〔講演〕午後１時１０分～２時１０分
　　横田冬彦氏（京都橘女子大学教授）
　　「江戸時代の書物と読書」
　〔サブ報告〕午後２時４５分～３時１５分
　　木村修二氏・石川道子氏
　　「震災後の市民による古文書を読む会の展開と成果」
　〔ディスカッション〕午後３時１５分～３時４５分
　〔展示報告〕午後３時５５分～４時４０分
　〔ワインパーティー〕午後４時４５分～　（会費お一人様 2000 円）

■主　催　歴史資料ネットワーク（略称　史料ネット）
■後　援　ＮＰＯ法人シンフォニー・宝塚市教育委員会・尼崎市・神戸市文書館（順不同）
■協力・会場提供　園田学園女子大学

＊＊
☆このニュースは、ＮＩＦＴＹ－Ｓｅｒｖｅの歴史フォーラム・歴史館２番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。
★史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
http://www.archivists.com/ または http://member.nifty.ne.jp/archivists/
または http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/
＊＊

史料ネット NEWS LETTER　No. 30　　2002.11.5（火）
編集・発行　歴史資料ネットワーク　〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565　e-mail s-net@lit.kobe-u.ac.jp
URL:http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/welcome.html